

実生新花と花の謎 その12

—花仙桜・3系統の融合—

清水 弘 神奈川県相模原市

花菖蒲の実生を開始して30数年を過ぎたが、毎年1000本近くの実生を咲かせて来たので、延べ30000本の実生花を選抜したことになる。最初の20年位は初花を見た感動の方が先に立って、どれもが素晴らしい花に見えていたが、最近ではもう少し冷静に、時には突き放した意識で自分の実生花を見ることが出来るようになった。花菖蒲の実生選抜は焼き物の窯だしに似ている。それまで周到な準備をしても、その時の火加減や冷却状態によって、粘土のしまりや釉薬の流れ、発色の違いを生じ、加えて粘土と釉薬の収縮差によって様々にひび割れた景色を表面に現す。

何事においても最終段階で『何れを良とするか』の選択行為には、それまで培ってきたセンスが最大影響を及ぼす。名陶工が時として窯だししたばかりの何百もの作品を打ち欠く様子は、育種家が何百本、何千本もの実生花を抜き捨てる姿と実によく似ている。いつの世でもどの分野でも、選抜行為にはあるレベルのセンスが求められる。センスはトレーニングによって磨かれ、審美眼が生まれてくるものである。トレーニングのコツはより良いものを繰り返し見ること、その対象を好きになって関心をもつことである。次いで対象を美の観点から評価し、その理由を他人に説明できるようにすることが大成への近道である。

古老から『どうも近年発表される実生花に、良いものがないのは残念なことだ。』と言われるが、同様な印象を述べるベテラン会員も多い。小生は本会に入って30年を過ぎたが、それ以上の40年・50年という会員歴を持つ方々は、西田衆芳園より伝えられた熊本種の伝統的な評価基準をきっちりと学んでいるからであろう。熊本系の完成された評価基準をマスターしてからでないか、江戸系の優れた育種選抜は無理ではないだろうか。特に濃厚な色彩で印刷された近年の通販カタログ等を眺めて育った人達は、色彩で誤魔化され

てしまっていて、「形」を見つめる眼が十分磨かれていないのではないだろうか。

さて今回紹介する花は1999年に初花を見た。南アルプスの仙丈ヶ岳を望む高遠城址公園のコヒガンザクラをイメージして命名、2005年に品種登録したものであるが知名度はまだ低い。

淡色ピンクに白筋が入る肥後型品種で、「花の宵」（千姫・美吉野・曲水の詩の交配系）と「御殿雛」（連城の壁・桜獅子・大淀・連鶴の交配系）との交配から生まれた。花型は母親となった光田系譲りだが、淡色ピンクの花色は父系の桜獅子、そして白筋パターンは同じく父系の連城の壁から来ていると考えられる。つまり、肥後系・伊勢系・江戸系の3系統が融合した品種だが、類似花がないという新規性と現代人好みの美しさを兼ね備えるには、こうした複雑な交配に拠らなければならぬ時代に突入しているのだろう。



蛇足だが、昭和中後期から生まれた新花は米国系を含めた極めて複雑な交配から生まれたものが多く、系統という血筋を示す用語の使用ではどうもしっくり来なくなっている。「系」に替わって、外部形態を示す「型」という漢字を与える方が具合は良さそうで、発音は同じでも、記載する時は「江戸型」「肥後型」「伊勢型」「長井型」などと記録したい。